

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

サーミ語 : SAAMI

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4541

【主な使用地域】 かつてはラップ語と称されていたことからわかるように、北欧でラップランドと呼ばれる地域が伝統的なサーミ語使用地域。スカンジナビア半島の中部山岳地帯からロシアのコラ半島にまでおよぶ広大な地域で、現在、その範囲は縮小しつつあるが、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアのいくつかの集住地が点在している。最大ほぼ7~9万人のサーミ人のうち3万5千人ほどが話すと言われる。



どんな言語？

系統的にはウラル語族に属し、フィンランド語やエストニア語などバル

トフィン語といわれることばと比較的近い関係にあります。しかし、これらの話者との相互理解は不可能です。サーミ語は、9つの言語に分かれ、スカンジナビア半島中部からコラ半島へ順に分布しています。

サーミ語には隣接して話されてきたフィンランド語と共通する特徴が多くあります。基本的に接尾辞を多用する「膠着語」である点、名詞が格語尾による語形変化を行い、また所有者の人称と数を語尾により標示する点などです。次は北サーミ語で boazu「トナカイ」の単数主格形に所有接辞がついた例です。bohcccon(1人称・単数)「私のトナカイ」、bohccot(2人称)、bohccos(3人称)。しかし、母音交替など「屈折語」的な特徴も備えていますし、「母音調和」(フィンランド語の項目参照)がない代わりに、双数という範疇を持つ点は、フィンランド語にはない、古いウラル語の特徴です。例えば1人称の代名詞主格形の単数・双数・複数形は mun : moai : mi となります。

音韻面の特徴として、北サーミ語には、破裂音、破擦音の「前帯気音」化があり、これはアイスランド語など北欧語の一部にも見られる現象です。また、子音、子音結合が、音節の開閉等により量、質的に大きく変化する、(フィンランド語よりはるかに)複雑な子音の階程交替をもっており、外国語として学ぶ学習者の悩みの種となっています。

語順は基本的に SVO。動副詞や分詞など動詞の非定形を用いた副詞句、名詞句、形容詞句を文中に埋め込む構文と、従属接続詞や関係代名詞を用いた副文が発達しており、しばしば同じ内容が両者によって表現可能です。「オオカミの食べた肉」なら Biergu「肉」maid(関係代名詞-対格) gumpe「オオカミ」lea(be 動詞-3人称・現在)borran「食べる」(過去分詞) =gumppe「オオカミ」(属格)borran「食べる」(動名詞)biergu「肉」です。

● 使ってみようこんな表現！

まず基本的な、「こんにちは」にあたる挨拶は、Buore beaivvi.「よい日を！」^{ブオレ ベアイヴィ}と言い、相手は Ipme! att! ^{イプメル アッティ}と答えますが、これは文字通りには「神よ、与えよ」という意味。普通、「やあ」ぐらいの軽い挨拶は Bures ^{ブーレス} と言い、相手は、それを2度繰り返すことが多いようです。「元気ですか」は Mii gullo? ^{ミイ クーッロ} で、「ありがとう。元気です」は Giitu bures. ^{ギイトゥ ブーレス} となります。別れる際の挨拶には、去る人に向かつては、Mana dearvan. ^{マナー デアルヴァン}、残る人には、Báze dearvan. ^{バーゼ デアルヴァン} と言います。それぞれ、「元気で行きなさい」、「元気でいなさい」という意味ですが、この例は相手が1人の場合で、相手が2人かそれ以上の場合は manni, mannet; báhcci, báhcet となります。自分の名前を紹介する場合には、Mu namma lea ^{ム ナン ママ レア} Biera. ^{ビエラ} 相手に名前を尋ねるには Mii du namma lea? ^{ミイ トゥー ナン ママ レア} と言います。サーミ語には、所有をしめす「持つ」という動詞はありません。所有は be 動詞の3人称を用いて、「～に～がある」という表現をします。Lea-go ^{レア ゴ}「ある+疑問詞」dus ^{トゥス}「あなた+所格」biila ^{ビーラ}「車」? で「あなたは車をもっていますか」。持っている場合は Lea. ^{レア}「あります」、ない場合は Ii leat. ^{イー レアット}「ありません」となります。

サーミ語の今

サーミ語の9つの言語のうち、現在唯一、かつもっとも活力のあるのは北欧3国にまたがって話されている北サーミ語のみで、約2万5千～3万人の話者がいるといわれています。他の南サーミ語、ルレサーミ語、スコルトサーミ語、イナリサーミ語、キルディンサーミ語は数百人から2千人までの話者のみで、すでに重度の危機言語とみなされています。

北サーミ語は現在、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドにより法的に地域的な公用語と認められ、話者は行政サービスなどにおいて使用の権利を与えられています。フィンランドやノルウェーでは、サーミ

サーミ語を話す人びと

サーミ人は近年までラップ人と呼ばれ、トナカイ遊牧の民として描かれてきました。確かに、フィンランドをのぞくスカンジナビア北部の伝統的サーミ人居住地域では、トナカイ飼育は排他的特権として認められています。しかし、今日伝統的なトナカイ飼育や狩猟を主生業とする人は限られており、多くは多数派の人々と同じく農牧業、漁業、観光・サービス業、自治体の公務員として働いています。サーミ人の居住地域を訪れても、一見それとわかるのは地名や施設名のサーミ語表示ぐらいです。

それでもサーミ人はしっかり生きています。彼らはヨーロッパでは数少ない、所属する国家により先住民と認められた少数集団です。彼らの民族としての言語・文化の保護、さらに伝統的居住地域における河川・トナカイ放牧地等への権利の回復を求める運動は1970年代前後から活発化しました。世界的な少数民族や先住民の運動の盛り上がりと呼応して、サーミ人たちは、主に文化自治のためサーミ人を代表するサーミ議会を各国に設立したほか、サーミ語を地域的公用語とするサーミ言語法などを実現させてきました。現在では、自治領は持たないものの、各国にまたがるサーミ評議会やサーミ共通の民族旗、民族歌など、形の上では国家をなぞると思える装置をいくつも持っています。

現在サーミ人は、サーミ語を話す人も含め、ほとんどすべてが居住する国家の主流言語を話し、日常生活においても、過疎化した北部という地域的な問題以外、多数派の人々とほとんど変わることはありません。

サーミ人への偏見も差別も記憶以外にはほとんどなくなっています。このような状況下であえてサーミ人であることを意識し、サーミ人を生きるということ、少数民族として生きることの意味が、今問われているのかもしれない。



秋、屠殺のため丘陵地に集められたトナカイ。
作業はサーミ語で行われる。
(ノルウェー、カウトケイノ地区で)